

ずいそう

ちよつとの楽しみ

根本 信行



ここに来て明るい話題を口にすることがめっきり少なくなった。どうも今の時代は、いろいろな面で頂上の近くまで辿り着いてしまったらしい。これから更に上を目指して登れるものなのか、現状を維持するのが精一杯なのか、はたまた少しずつ降りて行かざるを得ないのか、正直戸惑いを感じてしまう。

あたかも問題だけがうっせきし、楽しむなどということはどこかに吹っ飛んでしまったかのようなのだが、先行き不安ばかりを言っておられない。このような時にはたわいないことに思いをはせ、一呼吸おいて考えることも大切なのであろう。そんな気持ちから、これまでの楽しかったことなどを振り返ってみたい。

子供の頃を思い起こして述べるのは気恥ずかしさがある。体を動かせば楽しかった小学生時代。家に帰るのも忘れ、服がボロボロになるまで遊んだ。また遠足は寝られないほどの楽しみで、当日を待つまでの時間がゆっくり過ぎると思った。

そんな頃に姉に連れられて初めて映画館に行った。ひばり、ちえみ、いずみの御三家が出演するコメディータッチのものだが、ストーリーは全く覚えていない。学校で見るものとは違い、面白い世界があるなど子供心を感じた。これが映画に興味を持った切っ掛けである。

中学や高校になると、吉永小百合と浜田光夫の日活青春ものシリーズ、石原裕次郎・太平洋ひとりぼっちでのマーメイド号が着いたゴールデンゲイトブリッジは眩しかった。

しかし邦画よりもどちらかと言えば洋画を好んで見た。記憶はおぼつかないが浮かぶままにあげると、コニーフランシスの渚のデート、プレスリーの太陽の下の18歳、オリビアのロミオとジュリエット、ヘップバーンのローマの休日、ダスティン・ホフマンの卒業、俺たちに明日はないのボニーとクライドなど、きりががない。そしてピーターフォンダとデニスホッパーがハーレーに跨ってひたすら旅を続けるイージーライダーは、自由というアメリカ文化を焼きつけさせられ、当時の自分にとっては圧巻だった。

映画に流れるBGMの効果は絶大である。音痴の自分だが、不思議にメロディーだけは頭に残る。どの映

画だったか忘れたが、サングラスの女性が金髪をなびかせ、地平線に向かって疾走させるピックアップのカーラジオから流れでる小気味良いウエスタンには、憧れのようなものさえ感じてしまったものだ。

今でも音楽を聞くことは好きである。最近では、体がグタグタで何も考えたくない時、ちょっと楽しむと心が休む。特にこれといったものはないが、バックにギターの演奏が入るものをよく聞く。たまに行くショップでアルバムジャケットにギターの写真がのっていると、すかさず買ってしまふ。帰って聞いた時にピンとくれば、宝物を探した気分になる。反対に、一回だけで終わってしまうものも残念ながらある。

このようにして数年前に偶然出会った、ギターの横にたたずむ女性シンガーのCDがある。シェリル・クロウという米国歌手のもので、曲調は干し草の香りが漂うような懐かしさを感じさせ、聞くとなぜか癒されたような気分になる。

彼女は1962年ミズーリ州生まれで、有名なミュージシャンのバックボーカルを経た後、93年に最初のアルバムを発表している。それに収録された「ストロング・イナフ」は、アコースティックギターのオープニングで歌い出され、子守歌のように聞いているといつしか寝てしまう。

さて、昨年のクリスマスイブの帰宅途中、混雑する駅のホームに鞆と白い包みを持った男性がいた。電車がすべりこみ、駅員におされて満員の壁に向かって辛うじて乗り込んだ。ドアが閉まりよく見ると、ケーキが入っているだろう包みを持った手を頭の上まで挙げており、きつい姿勢のまま潰さずに届けられるか心配になった。約束の時間に必死となる姿には、その人には申し訳なかったが、微笑ましい光景だなど感じてしまった。きっと温かい家庭が待っていたのだろう。

つまらぬ事ばかりを言ってしまったが、今の閉塞感には単純ではないだろうし、それを乗り切るには相当の覚悟も必要なのだろう。ちょっとしたことを楽しみながら少しでも余裕を持ってやっていければと思う。